

## 平成 27 年度からスタートする総合科学技術研究科（修士課程）

工学部長 佐古猛

平成 27 年 4 月から、修士課程の工学研究科、情報学研究科、農学研究科、理学研究科を統合した総合科学技術研究科（修士課程）がスタートします。図に示すように、これまでの 4 つの研究科の名称は、総合科学技術研究科の中では工学専攻、情報学専攻、農学専攻、理学専攻になり、これまで工学研究科の中にあつた機械工学専攻、電気電子工学専攻、電子物質科学専攻、化学バイオ工学専攻、数理システム工学専攻、事業開発マネジメント専攻は、機械工学コースのように専攻の代わりにコースを付けた名称に変更になります。一方、学生定員は従来の研究科や専攻の定員を引き継ぎます。その結果、新しい研究科の学生定員は 479 名、その中で工学専攻の定員は 262 名で全体の 55%になります。

工学部・工学研究科は、イノベーション人材やグローバル人材の育成という社会的ニーズに対応した人材育成を目指し、更に電子工学研究所の人的資源も生かして、平成 25 年度に改組を行い、従来の工学部 4 学科、工学研究科 5 専攻体制から、工学部 5 学科、工学研究科 6 専攻の体制に改めました。また工学分野を俯瞰できると共に、卒業・修了後は自ら学ぶことにより自己発展できる人材を育てることを目指しています。

平成 25 年度の工学部・工学研究科の改組、理工系 4 研究科の教員の所属を学部から修士課程に変更、グリーン科学技術研究所を新設して電子工学研究所と合わせて 2 研究所にすることと共に、研究所の教員を理工系 4 研究科の修士課程所属として、研究科と研究所の連携を進めました。しかし研究科や専攻間の壁は高く、学際的な課題やグローバルな問題の解決のために、個別の専門分野を越えて柔軟に対応できる理工系のイノベーション人材・グローバル人材の育成に対応するためには、まだ不十分と言わざるを得ない状況です。

修士課程においてイノベーション人材やグローバル人材を養成するためには、学部

の時に身に付けた個別の専門知識を高度化すると共に、その専門分野の回りを俯瞰する能力を育成することが重要です。更に今後、ますます進展するグローバル社会の中で、英語で自らの専門分野について学び、発表し、議論する国際化対応能力も不可欠です。これまでの修士課程の教育は、学生の専門性の高度化という点では大きな成果を上げていますが、「俯瞰する能力」と「グローバル化対応能力」の育成の面では不十分です。今回の理工系修士課程の統合による総合科学技術研究科の設置の目的は、これまでの研究科や専攻の枠を超えた分野横断的な教育プログラムの提供が可能な教育体制を作ることです。

図に示すように、平成 27 年度のスタート時では、新しい専攻・コースの基本的な単位自体は、従来の体制での研究科・専攻を引き継いでいますが、理工系の修士課程の教育を一研究科の組織の下で一体的に運営することによって、研究科の教育全体を見渡した分野融合的なカリキュラムの実現や研究指導への道が開かれると期待しています。例えば分野横断的な「研究科共通科目」や副専攻制度（他のコースや専攻の単位を 8 単位以上履修すると副専攻修了証が授与される制度）を設けることにより、広い視野での俯瞰する能力の育成が出来ます。一方、「研究科共通科目」の中の英語でのプレゼンテーションや英語論文の執筆に求められる英語運用能力のアップに対する科目、各専門分野において英語で講義を行う英語対応科目を積極的に受講すること、現在準備中の海外インターンシップに参加することにより、「俯瞰する能力」と「グローバル化対応能力」の育成が可能です。

総合科学技術研究科の新設により、工学専攻の学生の「俯瞰する能力」と「グローバル化対応能力」に一層の磨きがかかり、浜松から国内そして世界に飛躍することを期待しています。皆様の工学部・工学専攻への変わらぬご支援、ご協力をよろしくお願い致します。

# 総合科学技術研究科の組織図

## 総合科学技術研究科(修士課程)

情報学専攻 (60名)	理学専攻 (70名)	工学専攻 (262名)	農学専攻 (87名)
➤情報学コース	➤数学コース ➤物理学コース ➤化学コース ➤生物科学コース ➤地球科学コース	➤機械工学コース ➤電気電子工学コース ➤電子物質科学コース ➤化学バイオ工学コース ➤数理システム工学コース ➤事業開発マネジメントコース	➤共生バイオサイエンスコース ➤応用生物化学コース ➤環境森林科学コース ➤農業ビジネス起業人育成コース

## 修士課程横断型教育プログラム

基礎(理)と応用(農・工・情)の連携

専攻の枠を越えたグローバル化、博士キャリア支援

副専攻の導入による分野融合的イノベーション人材育成